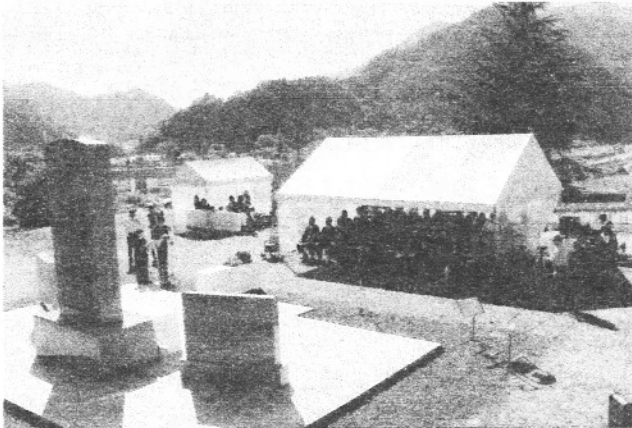


<10月19日>
報告

記念碑前の集いと善福寺の追悼法要

加藤 陽祐

10月19日、快晴下の安芸太田町の安野発電所と中国人受難之碑。13時30分、司会岡原美知子さん、楊小平さんの通訳で、「中国人受難者を追悼し平和と友好を祈念する集い」(西松安野友好基金運営委員会 主催)が始まった。



今年7回目を迎えた集いは、昨年までの6回と異なり、中国からの参加者は基金運営委員の3人(遺族・曲啓傑さん、元原告団長邵義誠さんの家族・張振倫さん、元河北大学教授・劉宝辰さん)であった。

それは、和解成立後の5年間の取り組みを経て、受難者・遺族を探し出して補償金を支給する、希望者が来日して集いに参加し労働現場跡を見学する活動が終了したこと。また5年間の和解事業と和解に至る経緯を日本語と中国語でまとめた大部の「和解事業報告書」が出版されて、和解事業が一区切りしたことによる。

しかし、受難者個々の状況が写真付きで掲載された報告書の出版によって、碑の果たす役割が軽くなったわけではない。これからは「安野 中国人受難之碑」と「和解事業報告書」が共に安野への中国人強制連行の真相を伝え、日中友好を進展させる上で両輪の役割を果たすことになると思うからである。

和解の営みを続けよう

参加者全員で黙とうした後、主催者として挨拶に立った内田雅敏基金運営委員長は、和解成立からの経過を振り返り、今後の運動の在り方について言及された。和解事業の進展について、受難者・遺族探しに献身し

た中国の関係者と日本の支援者の不断の努力に対し深く感謝の意を表された。そして「日中両国の子々孫々の友好」を願った「安野 中国人受難之碑」が今後の日中友好へ貢献することへの期待を表明された。そして尖閣諸島、靖国参拝問題でこじれた両国関係について、日本が中国国民に与えた損害の責任を痛感し深く反省するという日中共同声明の前文の精神に今こそ立ち戻らなければならないとし、わかりやすい民話をひいて、和解の営みを続ける必要があると結ばれた。悠久を見通したたかな心意気が感じられ元気づけられた。

つづいて張振倫さんが受難者・遺族代表の邵義誠さんの挨拶文を代読した。資料の日本語訳を目で追いながら、邵義誠さんの連行後の後半生を想う。安野での非人間的な屈辱、日本から持ち帰った病気、貧困と一家離散の体験。「1996年に河北大学劉宝辰教授と日本の支援者たち(加藤もその場にいた!)が私を探し出してくれたお蔭で、闘いに立ち上がり尊厳を取り戻した」——この下りは何回聞いても衝撃的で感動的だ。他国の人間の生活をここまで破壊する国家犯罪、一体こんな不正義を引き起こす原因は何か。そして逆に一個の人間を前向きに変えるものは何か。訪中した時の温顔の老人の印象は、最高裁判決直後、西松建設本社に交渉を迫った時に一変した。尊厳の回復に命を懸けた一徹な思いがその行動にあらわれていた。呂学文さんが亡くなった後、原告団長を引き継いで重責を果たし、和解成立を殉難者仲間に報告した数少ない第一世代である。裁判のたびに来日し、広島での追悼集会の常連であった闘士が、今、高齢のため自重を余儀なくされ訪日がかたないのが悔しい。和解への道は険しかったが、私たちを引っ張ってくれてありがとう。

来賓の小坂眞治安芸太田町長が、中国人受難の地の代表として日中友好と平和の誓いを述べられた。小坂町長の挨拶を聞きながら、帰国した中国人受難者が町民から受けたささやかな親切を忘れずにいること、また町民の間に生じたという受難者への同情や人間的交

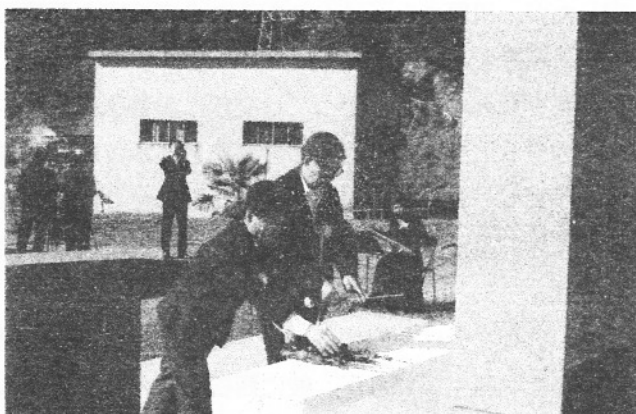
流も思い出すことができた。

中国駐大阪総領事館の周明輝副領事は、安野で屈辱的扱いを受けた中国人の尊厳回復のために努力した日中の関係者に感謝を表し、日中間の恒久平和を祈ると挨拶された。

「安野 中国人受難之碑」を揮毫していただいた藤井慧心善福寺住職は、この碑文が、日本人に反省を促し平和の大切さを教えることで、将来の日中の友好関係を持続させたいと展望を話された。

長年運動を支えてこられた広島県教職員組合の石岡修委員長は、和解事業に取り組む中で、日中の信頼の絆が強まってきたことを述べ、この碑文が両国の子々孫々の友好を願った意味を噛みしめていると話された。

主催者と来賓の挨拶が終わり、竹内ふみのさんによる二胡の調べが中国人受難の地に静かに広がる。その



中で献花が粛々と進む。和解事業の一区切りによって、遺族たちの参加がなくなったので、胸をえぐられる碑前の光景は今回は見られず、日本人だけで追悼する時が近づいていると思う。だが日本では強制連行などなかったとする風潮も芽生えた中で、それと軌を一にするかのように憲法が禁止する集団的自衛権の行使を容認する閣議決定がなされ、前事忘却の懸念が強い。ところで閣議決定といえば他ならぬ「華人労務者内地移入の件」が思い浮かぶ。1942年、これによって国策となり、日本支配下の華北で強行されたのが中国人強制連行だった。「安野 中国人受難之碑」の精神は今後試練の時を迎えるのだろうか。追悼と反省、この碑の前に多くの日本人に来てもらいたい。

集い終了後、参加者全員が記念碑前で記念写真を撮り、善福寺に移動した。

善福寺で追悼法要

はじめに川原洋子さんが、曲福先さん（曲啓傑さんの伯父）を含む5人の遺骨が善福寺で保管されていたこと、遺骨は1958年に中国へ送還され、現在は天津市の殉難烈士記念館に安置されていることを説明した。

当時、台湾に「出征」中の弟の身を案じて、お母さんが同じ年頃の中国人に親切にしていたことを覚えている地元の谷キヨコさん（90歳）が今年もお参りされた。また戦時中、中国で仕事をしていた関係で中国語に堪能で、1992年から数年前までずっと安野の受難者・遺族の通訳として活動してこられた谷尾博さん（95才）も息子さんに介助されて参加された。

法要はこの地で亡くなった29人のほか、安野のすべての死没者に対して営まれ、藤井住職により中国伝来の仏説阿弥陀経のお勤めがなされた。中国の線香と日本の焼香が準備されており、日本人も自然に日中両方の焼香をすることができた。

法要が終わり、曲啓傑さんが善福寺に対して伯父さんの遺骨の保管・供養のお礼を述べ、この縁を大事にして、善福寺を仲だちにして日中の関係を深めたいという気持ちを伝えた。藤井住職が「石碑の意味を後世にどう伝えるかが大切」と話すと、曲さんは「記念碑は中国では死者に対する言葉を述べるが、ここでは過去にとどまらず生きている人の希望にもなるようにしたい」と応えた。

曲さんはまた、谷さんに対して裁判の時に陳述書を書いてもらったお礼を、谷さんには安野の受難者・遺族の通訳と自分も宮島観光に連れて行ってもらったお礼を述べ、お土産の中国茶を渡した。「お茶には国籍がないので、今の状況にふさわしいと思い持ってきた」と説明し、中国人の尊厳を取り戻す闘いに協力を惜しまなかった日本の老人たちに心からの感謝を表した。

目前で進むこうしたやり取りは、半世紀以上も前に中国人に対する人間的な感情や交流があり、その記憶を大事にし時に具体的な応援もした日本人とその意味を受け継いできた中国人との交流であった。換言すれば、かつてこの地域で生まれた小さな友好の再現なのである。それは地域の歴史としてのみならず、この「碑」とともに広く語り継がれねばならないことだと思った。